はままつ演劇フェスティバル「劇突」自主公演 2025 審査会報告

★はままつ演劇フェスティバル「劇突」自主公演審査会
12 月 14 日 16:30～　於：浜松市福祉交流センター第 2 講習室

■出席者（敬称略/五十音順）
審査員
菊地奈々子
澤根孝浩
しむ
滝浪倫邦
深沢大助

司会
松本俊一
寺田景一

〇自主公演の概観
多様性に満ちた公演群であった。それぞれの面白さがあり、異種格闘技戦のような感じがした。 また、今日的な問題意識も反映されており、共生、平和といったテーマ性を含んだ作品が多くみられた。
演出、演技面でも、レベルの高さを感じたという声が多くあがる一方で、基礎的な、発声、滑舌などの訓練が足りてないのではないか、また、相手の台詞を聞いてなく、ムードで演技している場面も見られるとのきびしい指摘もあった。

★最優秀作品賞
　〇M-planet 「ウイルス•ライブズ•マター」作•演出:近江木ノ実

「ストーリーとしてわかりやすく、本来人間とウイルスは、敵対していて当たり前の関係が、劇的にひっくり返る醍醐味。現実社会の常識が覆る意外性が魅力。」
「劇の内容が、ウイルスや人の噂話等が盛り込まれ今日的であり、タイムリーであった。」
「役者陣が核になるキャラクターを中心によく劇空間を生きていた。」
「熱演すればする程、おかしみが増す劇構造の妙というか味が、秀逸だった。」
「劇中、人間の嫌らしさが目立ち、ウイルスの方が、純粋で、味方したくなった」
「ウイルスを擬人化するというアイデアが、他にはない」などの意見が、飛び交った。

また、舞台の出捌け口や、造りなどは、もっとシンプルでもよかったのでは？」との意見もあった。３票

他には、MUNA-POCKET COFFEEHOUSEの「水」を強く推す声もあった。
「作品のメッセージが強烈で、見なくてはいけない強い吸引力のようなものを感じた。」
「圧倒的な演出力を感じた。特に、重いテーマと笑いのバランス、視覚的要素、一見バラバラな方向を向かっているように見えた俳優達が、一つの方向に向かう熱量を感じた。演劇的な魅力に満ちていた」
「CASTやSTAFFのマネージメントが、しっかりされていた。」
等々
一方で、「いろいろな要素が、入っていて、ストーリーが逆にわかりにくくなっているような印象があった。それが焦点のブレに感じた。」
「少しくどく感じたシーンがあった、特に前半部分で。」
などの意見もあった。１票

劇団からっかぜの「あした天気になぁれ」も、
「装置が、しっかり劇空間を創っていた」
「演技が、ナチュラルでよかった」
「ラストの生と死の対比が、鮮やか」
「人が人を思いやる良い時代の話だからこそ、今やる価値がある」
といった声があった。
しかし、一方で「現代は、もっと厳しい空気なのに、素直にこの劇空間に入りにくかった」
「セリフが、役者にうまく落とし込めてなかった箇所もあった」
「舞台の大きさ、客席の広さが、芝居の空間に合ってなかった」などの意見もあった。１票

最終的に、３対１対１で、M-planet の「ウイルス•ライブズ•マター」が最優秀作品賞に選ばれた。
詳細については、審査員各氏の劇評を参照されたい。

★やらまいか賞
〇演劇ユニット FOXWORKS Produce「惑星と薄明のブラッドライン」
作•演出:第一章:木田博貴(劇団 Z•A) 第二章:川瀬義人(劇団川瀬組) 第三章:狐野トシノリ(演
劇ユニット FOXWORKS) 第四章:石川貴也(舞台創作チームサンリミット)
総合演出:木田博貴(劇団 Z•A)
脚本•原案:狐野トシノリ(演劇ユニット FOXWORKS)

「静岡県内の、東中西部地域バラバラの４つの劇団が、一つの演劇作品を作り上げるのに、それぞれ一章づつ担当してのオムニバスの形式をとっている企画が、新鮮だ。」
「それぞれの劇団が、それぞれ異なった特色の魅力を発揮していて、１公演で、4~5 度おいしいオトク感があった」
「最終章の５章にしっかり物語のコンセプトを落とし込んでいるのが素晴らしい。」
等々の意見があった。
逆に、「浜松の演劇フェスティバルで、あえてやらなくてもいいかもしれない」
「ラストシーンが、予定調和的ではないか？」という声もあった。

一方、MUNA-POCKET　COFFEEHOUSE について、
「最優秀作品賞が脚本賞なら、演出賞は、この作品」
「発想が面白い、エンタテインメント性と芸術性のバランスが良い。」
「最優秀作品賞に選ばれないならやらまいか賞は、MUNA-POCKET COFFEEHOUSE で。」
といった声もあった。

結局、「こんな形式の芝居は観たことがない。コロナ禍後に生まれた時代の落とし子とも言える。「演劇は、時代を映す鏡」との言葉もある。しかも、このオムニバス仕立ての４つのエピソードを一つの作品にまとめ上げた各劇団の勇気、エネルギーをもってして今回のやらまいか賞とするのが最も納得がいく。今回のやらまいか賞は企画賞。」との声が、大勢を占めて、演劇ユニット FOXWORKS Produce の「惑星と薄明のブラッドライン」に決した。
さらに詳細は、審査員各氏の劇評を参照していただきたいと思う。

★優秀俳優賞（五十音順）
•阿部美幸（シニア劇団浪漫座）
•大庭久幸（M-planet）
•川瀬義人（川瀬組）
•後藤みゆき（MUNA-POCKET COFFEEHOUSE）
•最上三平（劇団からっかぜ）
•山本茉利奈（MUNA-POCKET COFFEEHOUSE）

•阿部美幸さん
「舞台が進んでいくうえでのバランサーになっていたように感じました。
阿部さんがいたからまとまりが生まれていたように思います。」
「自由な舞台の中、最初から最後まで一本の道をしっかりと導く芝居をしていた。演技は安定していて、観客に安心感を与えていた。」

•大庭久幸さん
「ウィルスの「先生」という突飛な役を大袈裟な演技をすることなく、地に足を着いた演技で観客を信用させていた。発声・身体表現ともに素晴らしかった。」
「発声、動きが頭一つ抜けていました。
先生のキャラクター性を最大限引き出すことができていました。」

•川瀬義人さん
「個性豊かで魅力的な役者が多く出演する公演の中でも特に観客を惹きつけていたように感じた。」
「芝居に愛嬌があり、彼以外の人が演じたらつまらなかっただろうなと思わせる何か？があった」

•後藤みゆきさん
「体の使い方がとてもきれいで、声色、表情など表現方法も光っていたように思います。
特に後半部分の人が減った後からの狂気の感じがすごい良かったです。」
「作品の世界観と演技がとても合致していて、作品の世界観を観客に対して「見せること・信頼させること」への大きな貢献をしていた。」

•最上三平さん
「病床でありながらも、精一杯生きてるというものが見えてきた。言葉に現実味が伴っていた。」
「雰囲気が役にあっていてよかったです。
舞台を振り返ったときに一番印象に残りました。」

•山本茉利奈さん
「役の言葉や無機質なところからの微細な内面の変化が見えた。あの集団の中でのカリスマ性が伝わってきた。(但し、これは、集団全体の力でもある)」
「かなり難解な長台詞を無表情に、淡々とこなしてしまうスキルの高さ、また、先立つ母親の意志の強さもよく表現されていた」
(審査員の評)

※あまり触れることができなかったシニア劇団浪漫座の「古事記物語」だが、観客と劇団の距離の近さ、舞台美術、特に、大道具のような派手やかな衣装。また、歌ありダンスありで楽しめた。特に、ラストの挨拶は、圧巻！当劇団の持ち味である祝祭的演劇は健在だった。ただ、今回の作品は、エピソードの羅列に見えた。このレビューのような形式が、コアなファン以外の心(例えば審査員)を捕らえるには、ハードルを上げてしまった印象があった。より幅広い層にウケるには、最初から最後まで連ねるドラマが欲しかったのではないかと思う。 詳しくは審査員各氏の劇評を参照されたい。

〇おわりに
今回も、バラエティー豊かな作品群でした。演劇というジャンルの中とはいえ、このようなタイプの違う作品や表現に、評価優劣をつけようとするような行為そのものが、ナンセンスという声が私の心の中からも聞こえます。
ただ、演劇は、観客がいてはじめて成り立つ芸術、芸能、エンタメだと思います。お客さんは作品を観ることにより必ず感想を持つでしょう。また、評価を下すかもしれません。その感想を抱き、その思いをお互いに話し合ったり議論する材料に審査員の劇評やこの審査結果がなれば「劇突」が、より有意義なものとなると思います。それは、表現者と観客あるいは観客同士が、あるいは、その感想を聞いた表現者同士も、お互いがいかに同じか、そしていかに違うかを理解し合うことが、劇突の新たな発展や価値観を発見することに繋がるのではないかと思います。
だから、審査員各氏の劇評や審査結果を材料に大いに語り合っていただけたらと思います。
ただし、けんかはいけませんよ。語り愛、しゃべり愛、聞き愛、頷き愛しましょうよ！
私もその仲間に入れてください！
ああ、栄冠は、皆様に輝く！おつかれ様でした！！

劇突自主公演 2025 自主公演部会　　　松本俊一

（報告書文責・松本俊一）